様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　８ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１３０２０

研究課題名（和文）動作主を主語とする受害表現の歴史的研究

研究課題名（英文）A historical study of the malefactive with the agent as Subject

研究代表者
山口　響史（Yamaguchi, Kyoji）

愛知教育大学・教育学部・講師

研究者番号：５０８２３８１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、動作主を主語とする受益の表現（テクレル）が近世期において非恩恵用法を獲得するプロセスを明らかにした。さらには、同時期に出現する近世期におけるテクレルとテモラウの非恩恵用法の違いについて待遇的な側面から解明を行った。
上記の調査・考察を踏まえ、テクレルの敬語形であるテクダサルの近世期における位置づけ、受身文の受益用法の変遷の調査も行うことで、日本語における受益・受害構文の歴史について、体系的な推移の解明へ寄与した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
テクレルにおける非恩恵用法の獲得は、新たな受害構文が成立するということを意味する。これは受益・受害構文の歴史上、重要な転換点として位置づけられる。この成果によって、これまでの研究で明らかにされてきた受身文や授受動詞の歴史の整合性を確かめると共に、日本語における受益・受害の表現方法がいかなる変遷を辿ったかを明らかにすることへ寄与した。また、受益・受害という対立的な意味が日本語史解明における重要な観点となることを示唆した。

研究成果の概要（英文）：In this study, We clarified the process by which the usage of beneficence (te-kureru) acquired non-beneficial usage in the Early Modern period. Furthermore, We clarified the difference between the non-beneficiary usage of te-kureru and te-morau in the Early Modern period. We also investigated te-kudasaru, the honorific form of te-kureru, in the Early Modern period, and the transition of the benefactive usage of passive sentences, thereby contributing to a systematic understanding of the history of benefactive and malefactive constructions in Japanese.

研究分野：日本語学

キーワード：受益　受害　テクレル　テモラウ　受身　近世　上方語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中世以降、授受（補助）動詞の発達によって「受益」を明示する方法が確立していく。この授受動詞については、ヤル・クレル・モラウという閉じられた体系を成すことが注目され、先行論によって体系（視点制約による使い分け）確立の歴史が論じられてきた。現代語に見られる「受益」形式やプラスの待遇表現体系の歴史は、明らかになりつつある。

一方、テモラウとレル・ラレル（例、男に手を{握ってもらう/握られる}。）、テクレルとテクル（例、男が手を{握ってくれる/握ってくる}。）のように、現代語において、「益」と「害」に関わる表現が対になっているという意味の対立が歴史研究では看過されており、「害」にかかわる表現の歴史については、未解明である部分が多い。研究代表者は、これまでの研究でテモラウ文（受益）と受身文（受害）の対立に着目し、両構文の歴史が関わり合いながら発達してきたことを明らかにしてきた。他の受益・受害構文についても、意味上の対立に着目しなければ、変化の理由まで明らかにできないと考え、本研究に着手することとした。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本語における受益・受害表現の歴史的展開を解明することである。

そのために、まず、テクレルの発達（とりわけ非恩恵用法の獲得）の解明及びテモラウの非恩恵用法との関係把握を行う。そして、受身文や他の授受（補助）動詞の歴史とどのように関わり合いながら現在に至っているのかを明らかにする。

３．研究の方法

受益・受害表現の歴史的展開を明らかにするためには、まずは個別の形式の歴史を解明する必要がある。今回は、動作主が主語となる表現であるテクレルに着目し、まずは個別の語史を構築した。そのうえで、その形式に関連する語（敬語形や同一用法を持つ語）に調査の範囲を広げていく手法を採った。コーパスや文献資料を用いて具体例を収集しながら、現代語の理論的な研究を参照しつつ歴史の構築を行った。

４．研究成果

①テクレルの受害用法（例、そんなことしてくれちゃあ困る。）の成立

テクレルが成立し、現代の様相に至るまでの様相を記述・考察した。その中で、近世後期に成立する非恩恵用法（例、こんなときに、おれがなんぼあせつてはたらいて見ても、このやうに寐てくれてハ、とてもあたまが上らぬ。（諺臍の宿替））の成立過程をテクレルの発達と共に記述した。中古～近世後期にかけての調査では、元来、上位者から下位者へ与えることを表わしていたクレルが与え手･受け手の身分を問わず受け取ることを表わすようになる過程を記述した。また、テクレルが成立し、現代と同じく受益を表わすようになるのは、近世前期頃であることを明らかにした。その上で、テクレルの受益形式化が非恩恵用法の成立の契機となったと結論づけた。

②近世後期におけるテクレル・テモラウの非恩恵用法の違い

研究代表者のこれまでの研究では、テモラウの非恩恵用法の歴史的な調査を行っている。①の調査結果とこれまでの研究成果を踏まえ、近世後期上方語におけるテクレル・テモラウの非恩恵用法の違いについて観察・考察を行った。与え手・受け手・聞き手・話し手の関係を調査したところ、テモラウの非恩恵用法は専ら与え手である聞き手が話者である受け手と同じ場にいる中で使用されていたが、テクレルの非恩恵用法は与え手が話者である受け手と同じ場にいない場合にも使用されることがわかった。また、テモラウの非恩恵用法は丁寧語を伴って使用されることがあるものの、テクレルの非恩恵用法は丁寧語を伴うことは無いことがわかった。これらの成果から、テモラウの非恩恵用法がテクレルの非恩恵用法に比して、より聞き手（もしくは与え手）への待遇的な配慮のある用法であると結論付けた。

これらの成果①、②によって、受益形式の非恩恵用法の成立を明らかにしたことで、受益・受害の歴史において待遇的な側面への視点が開かれることとなった。本研究においては、この視点を基に研究方針の修正を行った。研究開始当初は、テクルやヤガル・クサルといった受害の形式を扱う予定であったが、それよりも現在明らかになっていることの整合性を高めること、すなわち、以下の③、④の研究成果に見える待遇的な側面から見た近世後期の受益表現の体系の把握を先に進めることを優先した。

③受害用法の発達する上方におけるテクダサルの位置づけの記述・考察

①、②の結果から、テクレルの敬語形であるテクダサルはどのように①、②の結果に関わるの

かを調査した。調査の結果、近世後期上方語におけるテクダサルが公の場で使用されるものであり、テクレル・テモラウとは当時異なる体系にあったとの見通しを得ている。

④受身文の受益用法の推移の中で授受補助動詞テモラウの発達を位置づけを捉える
　①、②の結果から、近世後期に同じく受害を表す受身文について、テクレル・テモラウが基本的に表す受益の側面からの歴史の変遷を観察した。調査の結果、受身文は、古代語において現代ではテモラウ文が想定される特異な受益の用法を有しており、その用法がテモラウ成立後に減ることをみた。そのうえで、受身文がなぜ受害なのか、テモラウ文がなぜ成立したのかについてそれぞれ考察を行った。

⑤近世後期上方語資料として大坂俄資料を翻刻しデータ化する
　①、②から近世後期上方語を詳しく調べる必要が生じたため、資料の拡充のために大坂俄資料を翻刻し資料性の検討を行った。近世後期上方語資料として使用に耐えうる資料を見出し、実際に②、③の研究に使用した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 山口響史	４．巻 115
２．論文標題 近世後期におけるテクレル・テモラウの非恩恵用法	５．発行年 2022年
３．雑誌名 名古屋大学国語国文学	６．最初と最後の頁 66-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/nagujj.115.80	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山口響史	４．巻 91(2)
２．論文標題 テクレルの変化と恩恵性	５．発行年 2022年
３．雑誌名 国語国文	６．最初と最後の頁 18-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口響史，井上歩果，寺坂愛生，野田ひな，藤井萌恵	４．巻 3
２．論文標題 一荷堂半水による大坂俄種本翻刻1『ニ〇カの種』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 大阪大谷大学STEAM lab紀要	６．最初と最後の頁 35-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山口響史，北庄司基博，佐藤竜之介，橋本奏，山野眞未	４．巻 3
２．論文標題 一荷堂半水による大坂俄種本翻刻2『俄の種本』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 大阪大谷大学STEAM lab紀要	６．最初と最後の頁 41-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口響史，三宅俊浩	4．巻 82
2．論文標題 近世後期大坂俄資料『風流俄選』の資料性の検討・翻刻	5．発行年 2024年
3．雑誌名 国語国文学報	6．最初と最後の頁 29-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口響史	4．巻 20(1)
2．論文標題 書評論文　村上謙著『近世後期上方語の研究―関西弁の歴史』	5．発行年 2024年
3．雑誌名 日本語の研究	6．最初と最後の頁 127-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 山口響史
2．発表標題 近世後期における受益構文の非恩恵用法
3．学会等名 名古屋言語研究会例会（第190回）
4．発表年 2022年

1．発表者名 山口響史
2．発表標題 テクレルにおける受害用法の獲得
3．学会等名 名古屋言語研究会例会（第186回）
4．発表年 2021年

１．発表者名 山口響史
２．発表標題 受身文の益-害表示と働きかけ性―中古と近世の対照―
３．学会等名 名古屋大学国語国文学会　令和5年度大会（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関